
中庸のたどる道

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中庸のたどる道

【Nコード】

N30290

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

オーブ首長国連邦所属コロニー、ヘリオポリス。人々の知らない時から存在するヘリオポリスの奥底では、知られざる英雄『アンノウン・ヒーロー』が眠りについていて。かつて人から変じたグノーシスと仲間たちと激戦を繰り広げた男。愛する者たちを失い眠りについていた彼は、ヘリオポリスを襲った戦火に再び目覚め、Ein Sof（神なるモノ）を駆り、再び宇宙へと飛び立つ。

目覚め

中立国オーブの資源衛星ヘリオポリス。はるか昔から存在しているそこではあちらこちらの工場が爆発し、そこから何体かのガンダムが飛翔していた。

ヘリオポリスには誰も近づこうとしない建物があった。小さい、鍵のかかった建物だ。その小さな部屋に一人の人物が眠りにについていた。爆音によって建物も揺れる。その揺れのせいか、眠っていた人物も目を覚ました。

「……眠い。まったく。死人をおいそれと起こすなというに……」

「せっかく最高の夢を見ていたというのに、目がさめればしがらみだらけの肉の檻か」

そんな皮肉げな口調で話す人物の名はソラ・ナナヤ。

「なんにしても私が起きたのだ。それはつまり、戦えということかやれやれ、まだまだ隠居には早いのかねえ、とぼやきつつすばばと着替えていくソラ。」

「さて、あの子たちを操るのも久方ぶりだが……なんとかなるだろう」

そういつて彼は部屋の奥へと姿を消した。

ところ変わってストライク内。そこにはたまたま居合わせた学生であるコーディネーター、キラ・ヤマトの姿があった。

「むちゃくちゃだ！こんなOSで、これだけの機体を動かそうだなんて！」

そう言いつつコクピット内でOSを書きかえるキラ。だがその背後からザフトのMS、ジンが襲いかかる。反応が遅れ致命的な隙を見せるストライク。もはやこれまでかと共にいたマリユールが思ったその時、ジンが何かに貫かれ爆散する。そこにはハンドガンを構えた蝶を思わせるような羽をもつ機体が悠然とたたずんでいた。

『パイロット君、聞こえるかい？聞こえているようなら聞いてくれ。いまどうやらOSを書き変えているようだが、その時間を稼ごう。早めに復帰してほしい』

一方的に言い放つとすぐに音声通信は途絶え、その機体はさまざまの速度で移動を開始、離れた位置からのハンドガンによる銃撃と右腕から展開されるナイフでのヒット&アウェイによってジンを撃破していく。

「よし、できた！加勢しますー！」

『ほう、早いねえ。驚きだ。銃での戦いのほうがいいな。やつらはどうやらあまり瞬発力がないようだから』

「わかりました！」

そう答えたキラもザフトに対し猛然と挑みかかった。

side sora

あの少年、動きそのものは素人だが、筋は悪くないようだ。あの数の敵相手に互角だ。ふむ、負けてられん。

「行くぞ？ デイナ。ナイラルサイフ転送！」

右手の部分から発生するサイフが二倍近くまで肥大し強い光を放つ。

それを構え敵の中へと突貫する！

リーチが長くなった武器に動揺したのだろう、動きが鈍った敵など撃ち落とすのはたやすい。縦横無尽に飛び回り蹴散らしていく。

「今のところ鈍った様子はないようだ」

あれから何年たったかもわからんからかなり錆びついていると思っていたのだが、杞憂だった。

次の瞬間左のハンドガンに異常を示すレッドアラート。確かめるとどうやら回路がイカレたようだ。

すぐさま放棄。スライフルを転送し装着。再び射撃に移る。

気付けば敵は一機を除いて掃討されていた。わたしはそのうちの一機のパイロットを抱えている。自らに挑みかかってきた機体のパイロットだ。気絶してはいるもののそれほど傷は深くないうえ、応急処置も施してあるため命に別条はないだろう。もう一人はかなり危険だ。重症である。出血が多いので力づくで止血してはいるが。

残り一機は岩山を粉碎して現れた足のようなものついた船を落とそうとしている。少年は別に現れた機体と戦っているため余裕がない。確かに普通ならば追いつくことはできないだろうな。だがこのデイナには長距離狙撃武装がそなわっているんだよ！！

「私を無視しようとは、いい度胸ではないかね！！」

瞬時に制御コンソールを起動。パスワードを入力。可変システムを起動する。腰のバインダーが大きく前進、複数のパーツが回転し、肩と腰のバスター砲が前方を向く。同時に背中のスラスターからはエネルギーが放たれ、反動に備えた。

「シークエンス完遂。グリップ展開！！」

腰のバスター砲からグリップが現れ、それをしっかりと握る。

「くらって消し飛べ！！」

『X・CANNON！！』

放たれた膨大なエーテルエネルギーの波動は船を襲おうとした機体に襲いかかる。パイロットはとっさにかわそうとしたがあまりの火力と範囲にかわしきれず、その機体の羽を片側失うという損害を受けた。エネルギーは直進を続けるが、羽を片方もぎ取ったのにくわえて大気に触れていたことで消耗、コロニーの壁に穴をあけることなく終息した。

片方の羽をなくした機体はふらつきながら退却。それを落とそうとした少年の放ったレーザーがコロニーの壁に穴をあけた。

当然内部の空気は外へと吸い出されるが被害はそれだけにとどまらなかった。先ほどまでの戦いの中で損傷していたシャフトが限界を迎え破断。そのほかあちらこちらでシャフトが折れ、爆発し瞬間にコロニーは崩壊、哀れな残骸をさらしていく。急激に空気が脱出することによる乱気流に飲み込まれた私たちはそのまま宇宙空間に放り出される。すぐさま航宙機シークエンスを機動。乱気流にのりながらヘリオポリスを離れていく。

やれやれ、またしばらく面倒なことになる。

s i d e k i r a

「そんな、ヘリオポリスが……」

あの戦いの果て、崩壊し無残な姿をさらすヘリオポリス。あれだけのコロニーがあつという間に崩壊した事実には愕然とした。

「僕のせいだ、あんな戦い方をした僕の……」

『なぜ己を責める？少年』

その時つながってきた通信にはさっきの男性。きれいな銀髪に黒推奨みたいな澄んだ黒い瞳。パイロットスーツを着てないけれど大丈夫なのだろうか。

『君は一般人なのだろうか？ならば責めることはない。』

低く、それでいて透る声で話しかけてくる。

「ただどあそこでシャフトを傷つけていなければ……」

『確かにシャフトが傷ついていたのが原因だろうが、元はといえばあそこで戦闘行為を起こした敵方が原因だろう。気に病むな』

「……………」

『無理ならば胸に刻め。あの姿を。そして学ばいい。二度とあのような悲劇を起こさないためにもな』

その言葉に救われた気がした。

s i d e s o r a

感受性の高い少年だ。それでいて強い意志を感じる。だが少しばかり揺らぎがあったな。

「ふう、久々だったからか、疲れたな。機体のほうはどうだ？」

アニメの器、エネルギー伝達に異常なし。スラスタイエローゾーン。スライフルグリーン。サイフ異常なし。機体損傷2%か。さてこの少年は……。寝ているだけだな。実に太い精神の持ち主だ。

『あの……、いいですか？』

「うん？どうした少年。なにかあったか？」

『いえ、ついさっきあそこの船から通信が入って、帰艦しろって。ついでに連れてこいとも』

「了解。そちらから伝えてくれ。礼を失するならば相応の対応をと

る、とね。それと少年、名は？私はソラ・ナナヤ」

『キラ・ヤマトです。伝えておきますね。僕についてきてください』

「わかった」

さて吉と出るか、凶と出るか。………わるいなお前たち。そっちに行けるのは当分先のようにだ。

ところ変わってアークエンジェル内。ああ、この名前はキラから聞いた。大天使とはずいぶん大それた名前なこと。それを言ったらデユランダルは英雄の剣だからなにもいえんが。E・Sは旧約聖書、ヤコブの子供たちの名だしな。どっちも怖いもの知らずだ。

OSをロックして………っと。これでよし

「今回の救援、誠にありがとうございます。助かりました」

「気にしなくてかまわない。ただ騒がしい虫を追い払っただけだ」

この女、典型的な軍人だな。融通が利かなそうだ。というか十中八九利かない。

さて、少年は……いた。よっと。

「キラ、無事」お前、コーディネーターだろ？」！？

この金髪男！！悔い改めろ！ちえりおおおおお！

「ぐは！！」

我ながらナイス！！斬りもみキックがきれいに決まって吹き飛んで行った。ああ、なんで蹴ったかといえば大体の情勢をここに来るまでにキラに聞いていたからだ。

おっと？銃を構えたな？礼を失したな愚か者！！

「礼を失するなと伝えたのだがな！！」

すばやくとりだしたナイフを阿呆どもに投げつける。無重力の中高速で飛んでいく刃物をかわすことなどできない。地上ならばふつうに地面をければいいだけだが、蹴ったところでどこに飛んでいくかもわからない宇宙空間の無重力の中ではそうもいかないからだ。

例外なくナイフは手の甲に突き刺さる。銃を取り落とした男の一人の髪をつかんで『禁則事項です！！』を蹴りあげる。

悶絶する男。他の男どもも腰が引けている。キラはきよんととしているが。可愛いな畜生！！

「さて、これが恩人たちに対する貴様らなりの礼なのか？なあ金髪男。この無神経種馬野郎。いつまで寝てる？おい。………起きやがれつつつてんだよこの無能が！！」

「うおお!?!」

「よし起きたな話を続ける。ナチュラル?コーディネーター?んなこと今聞くこつちゃねえだろうが、なあ、なんでそれすら分からねえんだ?そんなことも知らねえで軍人やってんのか、ああ?わたしはいったよな?礼を失するならそれなりの対応をするってな。ついさっきだぞ、伝えたの。もう忘れたのか忘れたんだな忘れたかそうかそうか忘れたかそこまで鳥頭かそうかよくわかった貴様の脳内構造は叩かなきゃ分からないのだなならここで思い出させてやるうあの男にやっみたいにな!!!」

「わかった!!!わかったから!!!」

「よろしい。後でいいからキラに面下げる。いいな」

「おう!」

ふう。息が切れた。

お?別の女が銃を下げさせた。なんだ常識的なやつもいるにはいるのな。

「ごめんなさい。礼を失する出迎え謝罪します」

「艦長なら体罰でも何でも使って部下は統制しな。それができないなら部下を持つな。下にいたほうがずっといい。それと、あの男に人にものを聞くときは言葉を選べと伝えておけ。あと、知り合いが怪我してるんでな、医務室貸してくれ」

「はい。バジルール少尉、案内を」

「はっ！」

そう答えたバジルールについて医務室に向かう私。やれやれ、前途多難だな

目覚め(後書き)

PSPのアサルトサヴァイヴをやっていたらどうしても書きたくなつたので書かせていただきました。

あはは、別のペンネームでやってるのと別のサイトでかいてるの合わせたら三作目……。何やってんだろ。しかも長編にし損ねてた……

それと作者、一切原作知識がないため、ネット情報やら友人からの情報その他で背景が完全に固まってから書いていくので、月一、もしくは二、三週間にいっぺんくらいになりそうです。運が良ければ一週間になるかもしれませんが。

そんなダメな作者ですが、見捨てずにいてくれるとうれしいです…

…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3029o/>

中庸のたどる道

2010年10月15日10時46分発行